

## 職業的社会化と看護学生の意識 — オープンキャンパス参加者の声と入学後の「看護イメージ」から —

内 山 久 美      大 澤 早 苗      横 山 孝 子

本研究の目的は、青年期にある看護学生の職業的社会化に向けた看護基礎教育方法への示唆を得ることにある。そのためにはまず、青年期の若者が看護についてどのようなイメージを抱いているのか把握する必要があると考える。そこで、進路選択時期にあるオープンキャンパス参加者の声と、4年課程入学直後における学生の看護イメージの意識調査をもとに、職業的発達の出発点にある学生の看護イメージをカテゴリー化した。その結果、職業的発達の出発点にある学生の看護イメージは、「思いやり」や「優しさ」を含む相手を大切にする関わりについてのカテゴリーが最も多く、職業的社会化に向けた望ましい看護師像の傾向にあることがわかった。さらに、その学生の看護イメージをプロフェッショナルへと育てるためには、身近な看護教師や臨床看護師が学生のモデルとなり、学生自身がその看護イメージを豊かに膨らませ成長できるように段階的に関わる必要性が示唆された。

キーワード：青年期，職業的社会化，職業的発達，看護基礎教育，モデリング

### I. 緒 言

今日の医療現場では、医療技術の進歩に伴い、対象である患者の権利が社会的関心を集め、患者の意志決定権を背景にした患者満足度を高めるために、サービスの向上を重要視する傾向へと変化した。看護に対しても患者の多様なニーズへのきめ細かい対応が望まれ、他者への配慮を基盤とする専門職業人としての倫理性が求められる<sup>1)</sup>。

しかし、今日における社会の期待とは裏腹に、基本的な理論や知識に基づく判断力などの知力の育成を重視する看護基礎教育と、臨床側が求める臨床実践能力とのギャップのために、新卒看護師のリアリティショックが問題点となっている。例えば、中川ら<sup>2)</sup>は、新卒看護師の実態研究の中で、新卒看護師の問題点として、「他者との関係形成の困難」や「気づきや配慮の不足」などの7つを挙げている。また、三輪ら<sup>3)</sup>は1997年に改正された看護基礎教育カリキュラムを修了した新人看護師に、「専門職に期待される行動の不足」がみられることを指摘している。このことは、臨床の場のみならず看護基礎教育機関においても重要な問題として認識すべきであり、看護基礎教育の方法や内容を検討し、工夫す

る時期に来ていると言えよう。

それでは、社会のニーズに応えられる看護師像とはどのようなものであろうか。看護の社会化の創始者であるナイチンゲールは『看護覚え書 (Notes on Nursing) —看護であるもの、看護でないもの』の中で、「看護の仕事ほど other's feelings のなかに自己を投入する能力を必要とするものはない。だから看護者のまさに基本的な能力は、相手の様子からその人の feelings を読み取れることだ」<sup>4)</sup>と述べている。看護師には、他人のフィーリングの中に自己を投入する能力が要求されるのである。つまり言い換えれば、看護師は、無理に患者から具合を聞き出さなくても、患者の表情から多くの変化を読み取るあるいは感じ取る能力を備えた者でなければならないと言えよう。そのためには、一人の人間としての豊かさを備えている必要があり、そのことが職業的社会化<sup>註1)</sup>を形成する基礎となり得るのではないかと考える。

筆者らは、これまで、2年課程修了前の学生が捉えた「看護者に必要な姿勢・態度」をPLC (Professional Learning Climate) の視座から検証し、縦断的研究の意義を述べてきた<sup>5)</sup>。本報では、看護(学)教育の中で職業教育がどのような変遷をた

どっているかを確認しながら、進路選択時期にあるオープンキャンパス参加者の声と、入学後の「看護イメージ」の意識調査をもとに、看護基礎教育における学生の職業的社会化に向けた取り組みへの示唆を得ることを目的とする。

## Ⅱ. 研究の意義

筆者らはこれまで、看護学生の職業的社会化を考える上で、今日のユースカルチャーと対人関係の希薄化について述べてきたが、ここで、わが国における中等教育における進路指導・職業選択の現状ならびに看護（学）教育における職業教育の変遷について触れておきたい。

### 1. わが国における中等教育の進路指導・職業選択の現状

わが国の中等教育における進路指導は、日本国憲法第22条ならびに職業安定法第2条の“職業選択の自由”を法的根拠とし、教育基本法第1条の教育目的“人格の完成”を究極目標としながら、学校教育法第42条の各2号に示されている“個性に応じて、進路の選択・決定の能力を養う”という目標を目指して行われる。

これにより、学校における進路指導は、「生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験及び相談を通して、生徒みずから、将来の進路を選択・計画をし、就職または進学して、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸張するように、教師が組織的・継続的に指導・援助する過程である」<sup>6)</sup>とされ、その教育的性格が明らかにされている。

ここ数十年來、発表された進路指導関係の研究調査や実践報告によれば、現代の中等教育における進路指導には3つの実践モデルがあり、学業成績に適合した進路の選択・決定を行うⅠ型、能力・適正に即した進路選択と進路先での適応を目標に知的・合理的選択を行うⅡ型、さらに個々の生徒のキャリア発達を促すⅢ型に分けられる<sup>7)</sup>。なかでもⅢ型では、学生の自己理解を含め、職業的自己概念を形成し、職業的自己実現に必要な能力・態度を育成する目的で、「キャリア・エデュケーション（キャリア教育）」または「職業基礎」を必須科目として新設する取り組みがなされている<sup>8)</sup>。

### 2. 看護（学）教育における職業教育の変遷

わが国における看護教育は、明治10年代の後半か

ら多くの看護師養成所で、ナイチンゲール方式教育パターン（カリキュラムの大部分を実地経験に当てるという形態）を採用し、高水準の看護教育が開始された。その基本的な考え方は、経験を重視する経験主義と、その経験は苦勞の多い厳格なものであるべきことを強調する厳格主義であった。ナイチンゲール生誕の地、英国から発信されたこの傾向は、それから130年を経過した今日まで世界各国に受け継がれており、我が国も例外ではない。

わが国の看護師養成教育は、看護師国家試験に必要な知識だけを教え込み、職業人として特定の態度を並行して伝えていく伝統的教育型から始まった。その後、職業人として必要な態度や知識を教授するが、同時に一人の人間としての豊かさも追求するという近代的教育型へと遷り、現在は、職業に必要な能力を育成することを目的に、一般教養科目と共に学問としての看護を教授する現代的教育型へと変わってきた<sup>9)</sup>。例えば、大学では、専門的な知識や技能の獲得とともに、人間としての教養の深さや自主性、創造性、倫理性、公共性、協力性等の社会性の涵養が教育の大きな柱となっている<sup>10)</sup>。

## Ⅲ. 研究方法

学生の職業への社会化を検討するにあたり、先ず青年期の若者が「看護」についてどのようなイメージを抱いているのか把握する必要性から、次の2点を研究材料とした。

### 1. 平成15年度オープンキャンパス参加者の感想

平成15年度に実施された本学オープンキャンパス（7月19日、8月23日、10月25日）での看護学科企画の模擬実習（「血圧測定体験」「心肺蘇生法体験」「赤ちゃん抱っこ・妊婦擬似体験」）体験者の感想（自由記載、述べ573件）を基に、職業的社会化のスタート地点にあたる進路選択時における職業（看護職）イメージを把握する。その趣旨の下に感想内容を表1に示した基準で分類し、カテゴリー化した。

### 2. 「看護イメージ」調査

平成16年度本学看護学科入学生111名を対象に「看護とは何かを表わすキーワードとその理由」について調査した（6月30日に、一人につき5枚のカードを配布）。調査にあたっては、その目的とデータの活用および取り扱いについて説明し、協力を依頼した。その結果、得られた初期カード（321

表1. 模擬実習体験後の感想分類基準

感想	；気づきに至らないもの。
気づき	；体験を通してわかったり、実感したレベルを表現。
動機づけ	；「気づき」の中から、今後について記述したものをさらに取り出す。
学び	；気づきを基にさらに思考を発展させ、抽象的に言葉を表現しているレベル。
対応	；担当する学生・教員（スタッフ）への評価。無意識のモデリング。

枚)をその意味内容の類似性(KJ法)によって分類し、カテゴリー化した。

上記1・2によって抽出されたカテゴリーを、職業的社会化の視点から分析、検討した。表1で示した基準および1・2のカテゴリー分類ならびにそれぞれの分析過程は3名の研究者で話し合い、調整し、ゆがみを防ぐようにした。

#### IV. 結 果

1. オープンキャンパス参加者から得られた模擬実習体験感想は573件であった(表2)。進路選択時

における職業イメージを把握する趣旨で感想内容を分類した結果、カテゴリーの多い順から<気づき><動機づけ><対応><感想><学び>であった(図1)。

2. 「看護イメージ」調査から得られた初期カードをカテゴリーした結果、【相手を大切にする関わり】【ナースのシンボル】【看護職の役割】【専門的な能力】【パートナーシップ】【労働環境】の7つのカテゴリーに分類された(表3)。

ここでの【 】はカテゴリー、<>は初期カードを示す表記とする。

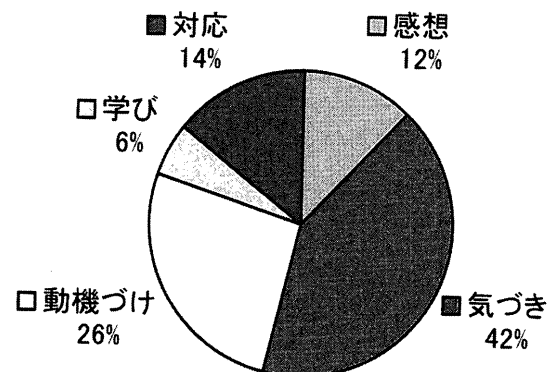


図1 模擬実習体験後の感想分類

表2. 模擬実習体験後の感想分類

模擬実習体験項目	感想	気づき	動機づけ	学び	対応	合計
心肺蘇生体験	4	48	53	9	50	164
血圧測定体験	38	63	18	3	14	136
妊婦疑似・赤ちゃん抱っこ体験	8	117	24	18	6	173
全体アンケート(要望・意見)	19	10	0	2	13	44
全体アンケート(学科選択理由)			56			56
合 計	69	238	151	32	83	573

表3. 入学直後の看護学生の「看護イメージ」

カテゴリー	カード数	サブカテゴリー			
1 相手を大切にする関わり	173	思いやり (66) コミュニケーション (7)	優しさ (48) 安心感 (7)	愛情 (24) 包容力 (2)	信頼 (15)
2 ナースのシンボル	47	ナースのシンボル (47)			
3 看護職の役割	46	支える (18)	看護職の役割 (14)	人助け (社会的貢献) (9)	ケア (5)
4 専門的な能力	18	専門的な知識 (8)	専門的な技術 (7)	専門的な能力 (3)	
5 好感の持てる印象	17	爽やかさ (11)	健康 (4)	真摯 (2)	
6 パートナーシップ	12	パートナーシップ (6)	自己コントロール (6)		
7 労働環境	8	労働環境 (8)			

## V. 考 察

考察に先立って、本学のオープンキャンパスのねらいについて述べる。本学のオープンキャンパスは、大学の広報を目的に平成13年度を初回に毎年開催されている。その中で、筆者らは看護の模擬実習体験コーナーにて、「看護技術」の一部を講義・演習という形で実施してきた。ここでのねらいは、看護への興味を体験者から引き出すことと、本学への入学の動機づけを高めることである。

学生の自主的な参加であるオープンキャンパスは、実際に職業を選択し決定するという現実が迫ってきた時期において、青年期の課題である自己同一性の形成における社会性の獲得のための課外活動のひとつであると言えよう。

### 1) オープンキャンパス参加者の声から

以上のことを踏まえ、オープンキャンパス参加者による模擬実習体験後の感想をカテゴリー別にみると、最も多かったのが＜気づき＞であった。その内容は、“お母さんの大変さがよくわかった”“抱っこの仕方があったなんて知らなかった”“脈の音が聞こえた時感動した”“救急車が来るまでの人工呼吸の大切さがわかった”など、体験を通してわかったり、あるいは実感したものがほとんどで、体験者の情動への刺激をもたらしたと思われる。

次に多かったのは＜動機づけ＞で、その内容は、“妊婦さんには手を差し伸べたい”“もっと勉強して血圧が上手く測れるようになりたい”“倒れている人がいれば愛と勇気を持って助けたい”など、気づきの中から今後の自己像について記述したもので、体験者は実際に体験したことから自己の行動を喚起させるような学習のプロセスを段階的に踏んでいることが窺える。

また、体験者自身が＜気づき＞を基にさらに思考を発展させ、抽象的な言葉で表現しているものを＜学び＞とし、“思ったより重くてびっくり、命の重さだと感じた”“血圧測定には相手への配慮もいるなと思った”“救急車が来る前にする処置がその人の命を左右することになるんだと思った”など、体験者の学習に繋がっているものもあった。そのような中、“楽しかった”“良かった”“難しかった”“緊張した”などの率直な感想レベルに留まったものもみられたが、短時間の模擬実習体験でも全体の

7割以上の体験者が効果的な学習を得る機会となっている。

最後に、模擬実習体験そのものに関する記述の他に模擬実習担当者の対応に関する評価を記述したものが全体の約14%を占めた。その内容は、“やさしかった”“わかりやすかった”“熱意が伝わった”“素敵だった”などで、このような自主参加型の場での模擬実習担当者の姿は、参加者の目標となる看護師像とも成り得るものと考えられ、無意識のうちにモデルとなって認知されていることが推察される。勿論、看護に興味を持つ学生が参加するオープンキャンパスという点では、当然肯定的な感想を抱くと予想され、結果そのものが即模擬実習担当者のモデリングに繋がるとは断定できにくいだが、模擬実習担当者の“看護を感じ取って欲しい”という願いが体験者に伝わり感想に表れたものと思われる。

### 2) 入学後の「看護イメージ」調査から

まず、最多を占めたカテゴリーの【相手を大切にしている関わり】で最も多かったサブカテゴリーは、＜思いやり＞＜優しさ＞であり、学生は思いやりをもって優しく接する看護者のイメージ像を描いていると考える。そのイメージの前提には、学生が意識する、しないに拘わらず、看護の対象として病気や怪我を理由に身体的・心理的な苦痛を有している人の存在があることを読み取ることができる。人々の生活において、看護職自体が身近な職業であり、これまでの看護者の思いやりのある対応や優しさを感じた学生の体験が反映されたキーワードになっていることも窺える。このことは、枚数は少ないが、＜愛情＞＜支える＞が上位に位置することからも推測される。ベヴィス<sup>12)</sup>は「看護とは、人に親しく接する仕事であり、人が人生において最も無防備で、脅かされ、痛みにさらされ、恐れ、希望もなく、友人や家族、慣れ親しんだ環境や日常から隔離された時に、そのような人に触れようとするものである」と述べ、看護における教育的学習にはケアリング<sup>註2)</sup>が不可欠であるとしている。このような前提に立つと、職業的発達の出発点にある学生の「看護イメージ」が、＜思いやり＞や＜優しさ＞等のサブカテゴリーから構成される【相手を大切にしている関わり】が最多を占めたことは、学生は、看護職への社会化に向けた導入がしやすい準備状態にあると解される。

また、学生のイメージの中に、これまでの生活の自らの病気体験を踏まえ、看護の対象が存在することは、対象の状態特性ゆえに「看護者に必要な姿勢・態度」が求められるという動機づけがしやすい状況にあると解される。動機づけは学習へ発展し、学習は情報量を増やす場であり、イメージを変える場になり得るので、どのような情報をどのような形で提供し、学生のイメージを豊かにしていくかは、看護教育者の重要な課題であると言えよう。その一方で、＜ナースのシンボル＞という外見的な“白衣”や“ナイチンゲール”で学生が看護をイメージしている場合は、その内実との間にギャップが生じやすく、先に述べた動機づけに困難を伴うことが予測される。イメージは、「真実と信じていること、主観的な知恵」<sup>11)</sup>であるから、教師は学生の描いているイメージ、つまり学生にとっての真実を職業的発達の出発点として捉える必要があると考える。

最後に、他の6つのカテゴリーの内容は多岐にわたり、学生が様々な側面から看護を捉えていることが解る。これには、今日の中等教育課程における職場体験や進路指導の充実、あるいは情報入手手段の多様さ等が影響していると思われる。

以上、オープンキャンパス参加者の声と入学後の「看護イメージ」調査から、学生が抱いている「看護イメージ」を把握することが出来た。今後、職業的社会化に向けて、この「看護イメージ」がプロフェッショナルへと存在するためには、先述したPLC (Professional Learning Climate) の要素が身につけられることを目標に、看護基礎教育の中でヒューマン・ケアリングを行っていく必要があると考える。先出のベヴィスが主張するように、看護教師は人間的なケアリングという倫理の見本を示し、学生と対話をもつことで構築された知識を強調し、その知識を学生個々の抱える倫理の問題と関連づけるよう励ますことが必要である。また、看護教師は、学習活動や学生との相互交流を通して、学生が自分にとって最も有意義で患者のニーズにケアリングをもって効果的に応える能力を高めるのに役立つ考え方をもてるように、意図的に導いていく必要がある。そうすることで、学生は「ケアされる人」としての経験をしながら、「ケアする人」である看護教師をモデルとして、「ケアする人」として成長していくのではないかと考える<sup>13)</sup>。

人間発達学を専門とする服部は、「学生は自分の

未知の未来、歩みゆく行く手を、希望と不安を持って目を凝らしてみている。そこにはじめて登場する生きたモデルという役割を、一人ひとりの看護教員は担っている。看護の世界を生きてきた人特有の笑顔や涙や汗の匂いが間違いなく漂ってくる時、学生は一人の人間として、また先を歩く職業上の先輩として教師を眺める。そして正負いずれであろうと生き生きとした感想を抱く」<sup>14)</sup>と述べている。要は、看護の教師そのものが生きている人間としてのモデルであることを自覚して学生と対話することである。その対話の中から学生自身がケアリングを体得し、職業的社会化を獲得していくものとする。

## VI. 結 語

今回、進路選択時期にあるオープンキャンパス参加者の声と4年課程入学直後の「看護イメージ」の意識調査を通して、看護基礎教育における学生の職業的社会化への取り組みに向けて、以下の教育的示唆が得られた。

1. 職業的発達の出発点にある学生の「看護イメージ」は、＜思いやり＞＜優しさ＞を含む【相手を大切にする関わり】であり、職業的発達に向けた望ましい看護イメージを抱いている傾向にあった。
2. 学生の看護師像をプロフェッショナルへと育てるためには、身近な看護教師や臨床看護師が学生のモデルとなり、学生自身が看護教師や臨床看護師との交わりの中で、看護イメージを豊かに膨らませ成長できるように、学生個々の発達状況に合わせて段階的に関わる必要がある。

## 謝 辞

本調査に協力いただいた平成15年度オープンキャンパス参加者ならびに平成16年度看護学科入学生に感謝いたします。

## 註

註1) 職業的社会化：職業人の社会的形成過程をさす用語で、これを1つの発達過程とした場合、就職するまでの「職業への社会化」と就職から

退職まで継続する「職業による社会化」へと進む。ここでは前者の「職業への社会化」の過程を指し、人間的成熟を意味する。

註2) ケアリング：倫理的反応の基本を形づくる人間関係のプロセスである (Noddings. N 1984)。ノディングスはケアリングの本質的な諸要素を「ケアする人とケアされる人との関係にある」とし、看護教育におけるケアリングの重要性を説いている。

### 引用文献

- 1) 宇田川廣美：新人に教えることとその視点，Nursing Today, 18号, no 4 : 27, 2003.
- 2) 中川雅子他：新卒看護師に対する教育の実態と課題，看護，56号, no. 3 : 41, 2004.
- 3) 三輪幸世他：看護師としての態度・行動を身につけるための新人看護師教育，看護，56号, no. 3 : 54, 2004.
- 4) 薄井担子：看護学原論講義，現代社，50, 1996.
- 5) 大澤早苗他：看護における職業的社会化と学生の意識—2年課程修了前の「看護に必要な姿勢・態度」調査から，保健科学研究誌，2号，69-78, 2004.
- 6) 西平直喜，久世敏雄：青年心理学ハンドブック，福村出版，590, 1991.
- 7) 同上（西平直喜，久世敏雄）：591-593
- 8) 同上（西平直喜，久世敏雄）：598
- 9) 杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学，医学書院，245-247, 2004.
- 10) 同上：599.

- 11) ボウルディング，K. E，大川信明訳：ザ・イメージ，誠信書房，4, 1970.
- 12) E・オリビア・ベヴィス，ジーン・ワトソン（監訳者：安酸史子）：ケアリングカリキュラム—看護教育の新しいパラダイム，医学書院，192, 1999.
- 13) 服部祥子：人を育む人間関係論—援助専門職者として・個人として—，医学書院，98, 2003.

### 参考文献

- 1) 藤岡完治他：看護教育の方法，医学書院，2002.
- 2) 田島桂子：看護実践能力育成に向けた教育の基礎，医学書院，2004.
- 3) 舟島なをみ：看護のための人間発達学，医学書院，2002.
- 4) 舟島なをみ：看護教育学研究—発見・創造・証明の過程，医学書院，2003.
- 5) 服部祥子：生涯人間発達論—人間への深い理解と愛情を育むために，医学書院，2002.
- 6) 見藤隆子：人を育てる看護教育，医学書院，1999.
- 7) 藤岡完治：感性を育てる看護教育とニューカウンセリング，医学書院，1995.

（平成17年1月24日受理）

内山久美，大澤早苗，横山孝子

〒861-5598 熊本市和泉町325番地

熊本保健科学大学

保健科学部 看護学科

## Occupational Socialization and Nursing Students' Awareness

Kumi UCHIYAMA, Sanae OSAWA, Takako YOKOYAMA

### Abstract

The purpose of this study is to identify the adolescents' image of nursing and to propose an educational system promoting the occupational socialization of nursing. The subjects of this study consisted of Group A: 573 individuals who had attended an open campus session held at Kumamoto Health Science University, and Group B: 111 first year nursing students at the same university. Separate questionnaire-surveys were conducted on both subject groups as to their image of nursing as a career choice. Data was classified into several categories and factors using the Kawakita Jiro Method. The category "awareness" received the highest score for subject Group A. The categories "consideration" and "kindness" received the highest scores for subject Group B. There is a need to consider these categories when nurturing nursing students in order to develop the occupational socialization of nursing. It is desirable for educators and leaders within the nursing profession to model and heighten a positive image of nursing towards the younger generation.